問に答ふ

問、水彩畫階梯には、臨本の模寫はなるべくなさゞるをよしとすと有之候處。三宅先生は、初學のうちは臨本より始めよとの御說に候、利害詳しく御示しあり度候。

茨城　河北生

答、臨本を用ふるの利益は三宅氏が說かれてありますから、爰には其害と思はるゝ點を竝べて見ませう。其缺點を心得てゐて臨本を模せば大なる害はありますまい。

一、現今の印刷術にては筆者の眞趣を傳へがたく、現在の臨本によきもの稀なること。

二、初學の人には臨本の良否を識別し難く、隨て惡しき臨本によつて習ひ得し癖の固疾となる患あること。

三、常にある一人のものゝみを用ふる時は、所謂何々式といふ畫風の中に拘束せられて、他日實物に對して觀察の自由を妨げらるゝ恐れあること。

四、常に臨本に依賴する時は、應用の力を養ひ難き事。

五、印刷の色と水繪具とは、其名同じくして其色異なるものあり。木版摺に於て殊に然り。夫がため意外の苦心多く、そして其苦心は徒勞なるべきを。

鉛筆畫の下地のある人なら、あまり臨本にたよらぬ方がよいと思ひます。平面の繪を模するは、直接自然物を寫すよりも容易ではありますが、要するに程度問題で、實物寫生と申しても、極々簡單なものから始められたら、さほどの困難もなく、そして興味の多い事は、他人の繪を模すの比ではないと思ひます。

寄書

水彩畫に志せし最初の動機

○　西多摩　晩韻生

私が繪を始めましたのは別に是れと云ふ著るしき動機は無かつたのではありますが、極く幼少の頃より總べての繪畫に對して崇高な興味を持つて居りました、鄙地の事で名匠の作などに接する機會は殆ど有りませむので雜誌の挿畫や版刷の繪を見るのを樂しんでゐました。

先年青梅町の鵜澤四丁先生や同地の珠郎氏の發起にて案山子吟社と稱し新派俳句の月次會を開かれまして其天位の句に對しては先生の水畫（裏紙に張りし小さきもの）を贈與せられた事がありました、私は或る處でふと其畫を見、非常に感動せられ頃日の野心は一時に崩えたち直ちに道具を整へて取かゝつて見ましたが果せるかな畫らしきものは一枚も出來ませんので三四ヶ月間は落膽の裡に葬られて別に畫いて見る氣にもなりませんでした。

其後珠郎氏より春鳥會のエハガキのを承りまして急につまらぬものを出しました所が僥倖にも交換品の美くしきものが參りました、夫れよりは一心に遣つて見る氣になり月々の課題が待ち遠しき程になりましたが如何にせむ、多くの時間を持たぬため充分練習を遣る事が出來ませんが、たまたま閑暇を得れば辨當と畫囊を背負つて野外へ走るのであります、初めは筆は動かず色の調和が出來ず亦好位置は見當らず隨分他人には呑氣の態に思はれながらも其實苦心慘憺を致しました。

特に不思議な事は、室内での臨本寫生には思ふやうにゆかぬ勝ですが一歩野外に出ると眼前が惚て實物なれば畫も自然實物に傾きて意外にも成功する事があります。また我々初心の徒は野外寫生程進歩を助ける術は外には恐らく無いなと信じて居ります。

＊　＊　＊　＊